年間選者賞（平成二十六年七月号～二十七年六月号）　黒岩剛仁選

鈴木恵子

（平成二十六年十月号）

指輪など似合はなくていいほれぼれと節榑だちし指を眺むる

ごろごろと大玉西瓜勢ぞろひコンコンボンボン採り時をしふ

木かげなく人影もなしぢりぢりと夏天に炒られ畑をたがやす

汗といふ汗ふきあぐるわがからだ間歇泉より頻度がたかく

伐る決める刈る抜く埋める蒔く縛るのぞみはせぬが真夏の奴隷

灼熱の体を冷やす夜の風停止せしままの思考がもどる

●作者の言葉

年年歳歳花相似
歳歳年年歌不巧

繊細な心の動きを、高度なレトリックで詠むという理想を、常に棚上げすること、丸八年。月に八首、日記ならぬ月・記を認め続け、生活の記録のような短歌に終始している自分自身を、哀れとも思っていましたが、この度、黒岩剛仁先生に「年間賞」を頂き、心から嬉しく思っています。

無限の大空、広大な土地、些末な事を一笑に付す野外での耕作の日日は、叙事歌になりがちですが、今後とも宜しくご指導ください。

●選者の言葉

昨年七月号～本年六月号で、私が特選に選ばせて頂いたのは、計四二人。その中で、二度ずつ選んだのは、矢澤春美、原尚美、松本ちゑこ、真田裕子、永田千奈、松本実穂の六人（何故か女性ばかり）だった。年間選者賞にはその中からとも考え、昨年十一月号の原作や松本ちゑこ作、十二月号の矢澤作や真田作、本年五月号の松本実穂作と改めて読み比べたのだが、圧倒的な労働の歌である上の鈴木恵子作に軍配を挙げることとなった。〈指輪など似合はなくていいほれぼれと節榑だちし指を眺むる〉〈汗といふ汗ふきあぐるわがからだ間歇泉より頻度がたかく〉など、炎暑の夏に全く負けていなかった。